

ほっとコーナー

第2号(平成24年11月15日)

『私の趣味遍歴』

編集委員 三宅恭次

編集子より「何を書いても良い」とのオファーを受け「私の趣味遍歴」を書くこととする。

先日、会社の大先輩とゴルフ、お手合わせするのは10年振り？私は自他共に認めるヘボゴルファーではあるが、なにせ相手は77歳、ティーショットは勝つだろうと思っていたが、なんと各ホールとも約20ヤード置いて行かれた！！よく聞くと毎日1時間のウォーキングと5kgの鉄皿鈴のエクササイズを10分間やっているそうだ。

フラッシュバック風に趣味遍歴を述べると、先輩に連れて行かれたスタンドのママに勧められて始めた謡、これは正真正銘三日坊主。表のお茶、左点前はないということを理由にお客を務めるばかり。テニス、これはまあ結構続けたが上手くはならず、年2回の泊りこみ合宿を楽しみに…。スキー、10数年、毎年志賀高原行。山登り、これも屋久島、南アルプス等にも…しかし、今やいづれもやっていない。現在進行形は毎朝ジムでの40分ランニング、これでマックス体重65kgから現在58kgへ、体調も良い。そして、俳句、毎月例会を居酒屋で開く。この座の文芸は大変奥が深い！！初心者も初心者ではあるが嵌っている。

最後に駄句をひとつ「老らくや 差しつ差されつ 秋の暮」、お粗末でした！

第3号(平成25年1月15日)

『わがまを言おう』

編集委員 通谷 章

私は長く文章の仕事に関わっている。随筆であったり、エッセイであったり、人様のゴーストライトであったり、むろん商業的な文章もたくさん書いてきた。

その割には、意味不詳の文章も多々ある。能力不足、勉強不足、人生の選択ミスと原因はいろいろ。仕事選びに失敗したなど思うが、取り返しはつかない。だらだらと続けるだけである。

文章は最初の一行が難しい。書き出し次第で次の行を読んでもらえるかどうかが決まる。俗に言う「掴み」である。

街づくりも似た匂いを持つ。駅に降り立った瞬間、その都市ならではの空気を感じる。面白そうな街だな、暮らし良さそうな街だなといった塩梅(あんばい)である。

広島はどうだろう。慣れきったせいもあるが、私にとって退屈な街である。もう「掴み」を覚えない。会話もなくなった「古女房ここにあり」といった感じである。要は安心ではあるが、物足りなさばかりが先走っていく。

街を語れば、魅力探しに尽きる。魅力の一つに変化がある。どんな美人も毎日見ると飽きがかかる、その論法である。

では、古女房にオサラバして若い別の女性を探すのか。刺激を与えてくれる女性を求めるのか。これにはちと勇気と予算がかかる。まして倫理的な側面も気持ちを萎縮させる。

女性を街に置き換えてみれば、多分、面白そうなものを建設する、どこそこを開発する、あるいは企業誘致を行うなどの表現が近いのかも知れない。にしても不可欠は先立つもの。

何がしかのお金は必要となる。さらには法的クリアなど、手がけていく段階で種々の困難さえ待ち受けている。

そうなる、このままでいいや。別にすぐに死ぬわけじゃないし…と自分を慰めるしかない。そんな会話をこの広島で延々と繰り返した記憶がある。みなさんは、どうだろうか。

街も人物同様に採点の対象にしやすい。広島は何点ぐらいの評価になるのか？

文化、芸術、スポーツ…もろもろを加味すると、まあまあ。採点すれば八十点ぐらいが妥当か。ただし、私の採点はもっと低い。欲望と願望が強いからである。

ことわっておく。私は、大変に「わがまま」な人間である。

さて、欲望と願望は街づくりに欠かせない。欲望と願望は平たく言うと「わがまま」である。「わがまま」は現状への不満と打破への原動力となり、同時に進化の可能性を併せ持つ。一見穏やかであっても、この両面を燻(くすぶ)らせながら街は動いている。

新年が始まった。そしてすぐに今年も終る。多分、そうだ。一日は長くとも、一年は短い。それとて年明けは、何らかの期待感もある。

今年の年の瀬に、刺激的な一年だったと思えるには「わがまま」がどれだけ街に反映されたかではなからうか。

「あなたも、わがまますをどうぞ一緒に、広島に！」 怠惰で動く気のない私の新年の一声がこれである。

第4号(平成25年3月15日)

『素人の野菜作り』

読者 松尾 彰

昨年3月の退職をきっかけに、畑をすることにした。友人の「耕耘機で耕してやるから、お前は石ころを拾うだけでよい」という一言で決心した。住んでいる団地は造成の悪い欠陥団地なので、土地が売れない。幸いなことに百坪の隣地も売れていない。そこで、地主にお願いして貸していただくことにした。なんと石ころの多かったことか。題名は忘れたが「畑に埋まっているという金銀を探してさんざん掘っても見つからず、お陰で畑が豊作になった」という民話を思い出しながら拾った。



畑作りの師匠も多く、いつの間にか、苗が植わっていることも再々である。ビギナーズラックもあったと思われるが、おかげで、去年は沢山の野菜を収穫することが出来た(写真)。きゅうり、なす、トマト、キャベツ、かぼちゃをはじめとして20種類ぐらいの野菜を季節ごとに楽しむことができ、ほとんど自給自足することができた。新鮮で安全な野菜を東京の孫に送ってやることもできた。何よりうれしいのは朝食のときにきゅうりやトマトなど必要な食材を畑からすぐに調達できることだ。良く熟れているので味も違う。

私の仕事はもっぱら雑草抜きと青虫除去であった。太陽の恵みを受けてすくすく育つ雑草を見て、つい太陽光パネルを連想してしまった。技術がこれほど進歩した現代なのにその有効利用はできないのかと、雑草を抜きながら不思議に思った。約30年前、西条の地に引っ越してきて以来、地元の人や友人からよく野菜をいただいて感謝した記憶がある。一方、自分が野菜を作ってみてわかったことは、野菜は食べきれないくらい一度になるということだった。おかげでもらってくれる人を探すという新しい仕事が増えた。

二年目となりこれから真価が問われる。もう少し勉強しなければと思っている。去年の暮れに大学の先輩から古代エジプトから出土したという「ツタンカーメンの豆」というのをいただいた。どんな豆ができるのか今から楽しみにしている。

『菓子博を叱る 後の祭り』

編集委員 通谷 章

ひろしま菓子博が終わった。一つの祭りが過ぎ去った。

連日、地方都市には珍しい人手で賑わった。県外からの入り込み客、団体ツアー、家族連れ。会場は連日押し合いへし合い、メディアは大盛況と煽った。だが、その後の私たちに何を残してくれたのであろうか。

会場は言うまでもなく、今後どのような活用をすべきか注目を集めている旧市民球場の跡地である。会期の最中、広島街づくりを考える有志の仲間と交流を持った。概ね、建築関係に携わる人々である。役人OB、設計家…いきおい、菓子博のことにも話は及んだ。きっかけをつくったのは私である。

「あれは博覧会というには恥ずかしい代物ではなかろうか、よくて物産展、正しく言えば菓子即売会としか思えない」

ご苦勞を重ねた当事者が聞けば、目をむく雑言を口にしてみた。

だが、私の発言、あながち過少でもない。反論を受ける前に頷く者も多かった。

まずの違和感は、入場料であろう。

博覧会と名乗るには、見ごたえ充分、意識を触発される展示、幸せを予感させる導線、入場料金に見合うものがなければならない。至極当然の帰結である。

しかし、庶民から支持を受ける最低条件をクリアしているとは言い難かった。ましてパビリオンと言うにはほど遠い。テントに入るには、長時間待ちの行列。せめて美味しい菓子を一口と、奪い合いの果て試食にもありつけぬ。ただ横目に汗をかくのであれば、広島の印象を損なって余りあろう。

第二会場、県立総合体育館への道のりも遠かった。

前回の菓子博を教訓とする混雑回避の話も伝わっていたが、どこに学びと知恵があったのか。流人さながらに、とぼとぼ歩く入場者の誰もが「教えて！」と叫びたかったのではあるまいか。加えて、会期早々に露見した出品業者の偽装販売も〈色を染めた〉お粗末さであった。

こういう予兆は、開幕以前にあった。あの「ひろしま菓子博」の文字である。

特に「ひろしま」部分の字体は見逃せない。蛇がのたくった感じで、市内あちこちで目にするたび「気色悪い」と多くの若い女性に叫ばれていた。さらに会場では、再入場の際、手の甲に押される「菓」の透明インキも黴菌に見えて不快を募った。誰が、あの字体を許したのか。

そうするとセンス以前、なぜに？と創作者の生理状態を疑ってしまう。

これらのお粗末さは、容認できる範囲かも知れない。敢えて「ひろしま菓子博」のみと言及できるものでもなかろう。博覧会？には、つき物の一こまかも知れない。

さて、私たちの視点は、今後である。菓子博閉幕後がどうなるかである。

当然、仲間たちの反応は多岐に渡った。その中で強く意識されたのが、ヨーロッパの都市づくりにおける考えであった。話は、参席の元広大I教授からである。

一つの都市を挙げてのイベント、例えば菓子博のようなものが実行される際、「先進国では、会場跡地の以後の使い道もきちんと計画が立てられており、理に適ったものが多い。広島の菓子博にはそれが無い」一、というものである。

なるほど、都市計画におけるロジカルの一つと思える。祭りはするが、その後を考えておかねば、憂いばかりが残ってしまう。

にしても広島は跡地が多い。旧市民球場を始め、広大跡地、空港跡地、駅前開発も跡地の一つに加えてもよい。見渡せば、後(跡)の祭りになる、候補者がずらっと並んでいる。主催者側及び各周辺団体等に厚い知恵があれば、繰り返されてきた「後の祭り」にはならない筈なのだ。

さてさて、慌ただしく「菓子博」は閉幕した。実にご苦勞様であった。

だが、大した事故もなく、無事に終わっただけでは情けない。一体、何が残されるのか。再び空き地となった会場跡に風が吹き抜けている。

第6号(平成25年7月15日)

『ユーチューブ・デビュー』

編集委員 瀧口信二

ザ・コストケنزの楽曲をユーチューブにアップロードした。プロでもアマでもない私の幻のバンドである。若い頃から音楽が好きだった。といっても、周りに音楽が溢れていたわけではない。ラジオやテレビから流れてくる巷の流行歌を聞いて、口ずさんでいた程度である。

ビートルズと出会ってから変わった。自作自演できる若き英国のロックバンドだ。自分にもできるのではないかと思わせてくれた。日本でも彼らに触発されて、吉田拓郎や井上陽水らのシンガー・ソングライターがキラ星のごとく登場していた。

私もギターを手にしたが、上達はしなかった。鼻歌交じりで数曲作ったが、目の前の就職を考えるとあきらめざるを得なかった。

そして、30有余年のサラリーマン生活を無事終える。晴れて自由の身となり、やり残し感のあった楽曲作りにいそしむことになる。

幸運にも、最後の職場でジャズマンと出会い、私の鼻歌に立派な演奏を付けてくれた。これまで自費でCDを制作し、友人たちに配っていたが、この度、めでたくユーチューブにデビューさせた。

世界のどれだけの人が聴いてくれるか楽しみである。万が一つにヒットするかもしれない。ドリームジャンボを買った気分である。

もし、この宝くじが当たったら、私のボランティアの財源に注ぎたいと思っている。

ただ、私はドリームジャンボを買ったことがない。(笑い)



第7号(平成25年9月15日)

『180円切符を片手に居酒屋探訪』

編集委員 前岡智之

日々、医者からの指示に従って生活している(出来る限りである)のだが、2～3日に1回、居酒屋に向かう。カウンターの前で2合ばかりの酒と2～3品をゆっくりやる。嗜好の時となる。何よりも楽しみにしているのが、板さんや女将さんと会話を楽しみながらお客の様子を観察すること。したがって狙い目は、定員10名ほどの歴史のある店であり、どこの街にも1～2軒はあるのだ。

そこで、たまに夕方から時間がとれると、面白い企画を実行する。可部線安芸長束駅から180円切符を片手に居酒屋探訪。北は緑井・八木の梅林まで西は西広島(己斐)まで、東は向洋。南は、横川を経由して十日市・土橋(290円かかる)までである。それぞれの町に着いてぶらぶらしながら居酒屋を探す。

一例として先日の居酒屋を紹介しよう。

小網町の〇〇〇、洒落た暖簾に惹かれてお邪魔した。おしろい気なしの中年美人が二人、L型のカウンター、お客は一人、絶好だ。とりあえず小生(こなま)を注文し、つまみを。カウンターの上には、小鉢が三つ。茄子のあげ出し、塩鯖の焼き物、それと——つぶ貝だ！早速、つぶ貝をお願いし、お品書きにある焼き玉葱とせせり焼きを注文する。そして、酒。いつもは、亀齢の純米をいただくのだが今日は、八海山の純米から。もちろん緩燗で。お客は、常連のようだ。

私 “素敵なお店ですね”
お客 “二人が大酒飲みでね。気をつけなさいよ”
私 “えええっ！それは楽しみですね。どの程度いけるのですか”
女将いわく “ほんの少々よねえ” “酔わない程度よねえ”
お客 “昨日下ろした一升瓶、まだ残ってる？”
女将 “もう一杯ぐらいはあるよ。でも新しいのがあるから”



こんな会話を聞きながら、ちびちびやるのが私。
酒は、ひとりで飲むのがよろしい。ひとりで飲んでいると、同じようにひとりで飲んでいる客と目が会って、そこから会話が始まることも多い。店の人もひとり客には気軽に声をかけてくれる。何気ない話からその土地の歴史や文化、人柄みたいなものが伝わってきて楽しいものだ。そして、自分自身もはっきり見えてくる。